

## トク・シモムラの「日記」 ——アメリカ合衆国市民への道——

金田由紀子

**要旨：**本論は、日系移民一世トク・シモムラ（1888–1968）の日本語手書き「日記」（一部を除いて未刊行の一次資料）を解説し、彼女の国家帰属意識の変化とその背景を探る試みである。トク・シモムラは、1912年「写真花嫁」としてシアトルに渡ったが、出生国が日本であったために、1952年「移民国籍法」制定まで、アメリカ市民権獲得の権利を奪われていた。彼女は長年シアトルで働き暮らしながら国籍は日本という、言わば2国に引き裂かれた状態で、1941年12月、日米戦争に巻きこまれ、日系人強制収容所での過酷な生活を強いられた。しかし、その理不尽な境遇の中、彼女のアメリカ合衆国市民意識が強くなっていった。本論では、従来ほとんど論じられなかった第二次世界大戦が始まった1939年の「日記」に焦点をあて、次に「戦中日記」での変化を論じたい<sup>1)</sup>。

### 目次：

#### 序論

- I. トクの「日記」1939年(1)：日本帰国への願望
  - II. 1939年の「日記」(2)：「キリスト教会婦人会」
  - III. 1939年の「日記」(3)：社会的背景
  - IV. 1941年・1942年の「日記」から
  - V. 1943年の「日記」：アメリカ合衆国政府との対峙
- 1) アメリカ合衆国建国当初1790年の「帰化法」では「自由な白人」に限り帰化（市民権獲得）を認めるとされた。1922年日系一世小沢隆夫の連邦最高裁への帰化申請が却下され、日本人が他のアジア系同様、「帰化不能外国人」であることが確定する（貴堂嘉之『移民国家アメリカの歴史』岩波新書 2018年、p.157）。アジア出身移民の帰化を可能とした1952年「マッカーラン＝ウォルター法」が制定された後、「トクは彼女に資格が与えられた最初の年である1954年にアメリカ市民権を獲得した。彼女の夫も同じ年に市民権を取った」とトクの孫でアーティストのロジャー・シモムラ氏（Roger Shimomura b.1939）が筆者へのemail（2017年10月13日付）で述べている。

序論：

トク・シモムラとは誰か——明治21年埼玉県に生まれ、大正元年に移民としてシアトルに渡り、助産婦をして自分の子供も3人育てた日系一世の女性である。移民の年から逝去の年まで、日本語で日記を書き続け、そのかなりの部分が残っていた貴重なケースである。トクが使っていた博文館の「当用日記」は、当時売れ行きがよく、日本では、日記書きが流行していた<sup>2)</sup>。また、移民としてアメリカ合衆国に渡った女性たちの中には教養ある女性たちが少なからず存在していたので<sup>3)</sup>、文筆に時間を割き日本語の日記を残した日系女性たちは他にもいたであろう。しかし、トク・シモムラの「日記」は、現在のところ、日本語で移民女性が書いた日記として、重要な博物館（スミソニアン博物館）に所蔵されている稀少な記録資料でもある<sup>4)</sup>。本論では、同博物館に所蔵されている同「日記」から、特に1939年から1943年までの「日記」未刊部分に焦点をあて論考を展開したい。

トク（以後本論ではトク・シモムラを「トク」と略称）の「日記」は、〈移民研究〉資料として<sup>5)</sup>、日系アメリカ社会における〈産婆職〉の記録・研究資料として<sup>6)</sup>、また、日本文学の日記文学史に位置づけられる作品として<sup>7)</sup>論じられてきた。筆者は、アジア・太平洋戦争中に書かれたトクの日記を「戦中日記」と名付けその概要を紹介した<sup>8)</sup>。しかし、トクの「日記」を世に知らしめたのは、何といっても、トクの孫にあたるアーティスト、ロジャー・シモムラ（Roger

- 
- 2) 鈴木貞美『日記で読む日本文化史』（平凡社新社 2016年）、186ページ。  
 3) 島田法子編著『写真花嫁・戦争花嫁のたどった道』（明石書店 2009年）、61ページ等参照。  
 4) 2016年2月19日、トク・シモムラの孫にあたるアーティストのロジャー・シモムラ（Roger Shimomura b. 1939）が国立アメリカ歴史博物館（National Museum of American History）に献呈した。  
 5) 伊藤一男『続・北米百年桜（四）』（PMC出版 復刻版：1984年）、pp.15-24。  
 6) Susan L. Smith, *Japanese American Midwives: Culture, Community, and Health Politics, 1880-1950* (University of Illinois Press, 2005), pp. 68-81.  
 7) ドナルド・キーン『百代の過客〈続〉——日記にみる日本人』（金関寿夫訳 朝日新聞社 1988年）、414-421ページ（「下村とく日記」）。  
 8) 金田由紀子「トク・シモムラの「戦中日記」——第2次世界大戦中に強制収容された者の記録として——」『経済研究』第9号（青山学院大学経済研究所 2017年3月）、pp. 39-58.

Shimomura, b. 1939) が描いた絵画シリーズ, *Diary Series* (1980–1983) と *An American Diary Series* (1997) である。ロジャー・シモムラは、祖母のトクが書いた戦中の「日記」をテキストとし、*Diary Series* では 25 点のアクリル絵画を、また *An American Diary Series* でも 30 点のアクリル絵画を描き、テキスト&イメージを完成させた。

アメリカ合衆国に移民として渡った日系人の歴史に関しても<sup>9)</sup>、また、日系人強制収容所の実態・及び戦時中における人権侵害に対する権利回復に関しても<sup>10)</sup>、すでに数々の著書が出版されている。しかし、トク・シモムラの「日記」は、「第2次世界大戦の体験を日系アメリカ女性の視点から、特に移民世代の女性の視点から語った第一次資料がほとんど存在しないため、女性史研究上重要である」とスーザン・L・スマスが述べているように、特別な意義を持っている<sup>11)</sup>。

本論では、まず、日米開戦前、1939年の日記を検討する。母親としての感情、トクが所属していたキリスト教会婦人会の活動など、ジェンダー特有の立場からの記述が目立つ。合衆国で市民権を獲得できない立場（「帰化不能外国人」）で、長い間シアトルで生活していてもまだ、トクは日本への帰属意識が強かった。次に、1941年と1942年の「日記」概要を述べる。最後に、ミニドカ強制収容所で書いた1943年の「日記」を取りあげる。特に1月・2月の「日記」に焦点をあてるが、アメリカ合衆国政府によって実施された忠誠テストや日系アメリカ人に対する志願兵の募集など、強制収容された日系人と合衆国政府との緊張関係が頂点に達した時期である。この時、強制収容されていた全日系人は政治的な決断を迫られた。トクはこの時期には、自分は正式なアメリカ合衆国市民であるべきだ、との明確な意識をもっていたと考えられる。戦地に兵士として子供を送る母親の気持ちもしばしば書いている。

9) 例えば、シアトルの日系社会の歴史を扱った書籍には、坂口満宏『日本人アメリカ移民史』（三進社、2001年）がある。

10) 例えば、竹沢泰子『日系アメリカ人のエスニシティ 新装版 強制収容と保障運動による変遷』（東京大学出版会、2017年）がある。

11) Susan L. Smith, “Midwife at Minidoka: Toku Shimomura and World War II,” in *Minidoka Revisited: The Paintings of Roger Shimomura*, ed. by William W Lew (South Carolina: Clemson University, 2005), p. 56.

トク・シモムラが書いた戦前と戦中の「日記」を比較し、彼女の国家帰属意識の変化を検証するのが本稿の目的である。トクの「日記」は、政治と戦争に翻弄されながらも、強く生き抜いて激動の人生を送った一女性の記録である。トクの「日記」で十分に言葉が尽くされていない内容は、当時の社会的・政治的背景を鑑み、アメリカ史・日本史の文脈において「日記」を解読した。トク of 思想形成・生活基盤のために、キリスト教会は重要である。トクの「日記」には必ずしも思想的表現は多くないが、キリスト教との関係も可能な範囲で論じたい。

## I. トクの「日記」1939年(1): 日本帰国への願望

1939年の日記には、トクの私生活上の悩みに対する赤裸々な感情と考えも表されている。トクが、「日記」に私的な内面生活を吐露するのは稀なことである。

4月21日、6月1日、6月9日の「日記」には、結婚を間近かに控えた長女ふみを育てた苦労が書かれているが、トクは長女については特別な悩みを抱えていたようだ。6月1日の「日記」では、次のような記述が目を引く。

永い間のなやみも片付く日近づく この上のなやみ来らん日ハ 己から去って日本にでも帰らんか否 自ら死して天に帰りし方が幸ならんか などと我侷な考えも湧く 思へば産まれて廿三年 実に心を苦しめられしよ 神様 願わくハ総てを忘れしめよ……<sup>12)</sup> (1939年6月1日)

12) 本論において日付と共に引用し又は言及しているトク・シモムラによる「日記」(日本語原本資料)は、筆者が、2016年4月にスミソニアン国立アメリカ史博物館で閲覧・調査させていただいたものである。Roger Shimomura Collection, Political and Military History Division, National Museum of American History, Smithsonian Institution より、本論への掲載の許可をいただきましたことに、深く感謝いたします。なお、本論に引用させていただく、トク・シモムラの「日記」(Toku Shimomura, "Diaries")は、以下の日付のものである。

- ・ The year of 1939: January 1; February 12; March 2; March 6; March 13; March 14; March 15; March 16; March 18; April 10; April 21; May 14; June 1; June 9; June 17; June 25; August 3;
- ・ The year of 1941: January 1; July 29; July 30; August 14; November 4; November 27; December 7; December 9;
- ・ The year of 1942: January 30; March 8; April 18; April 28; May 28; September 9;

「永い間のなやみ」の内容は書いていないが、この時点では、「日本にでも帰らんか」という選択肢が、まだ彼女の心の中に存在していた。日本に帰っての暮らしが現実的に可能であったかどうかわからないが、当時、彼女の国籍は日本である。アメリカ合衆国では、懸命に働き、3人の子供も育てたが、トクは「帰化不能外国人」であった。完全には根を張ることができない理不尽な社会環境の中、〈日本〉が彼女の心の中で、また現実生活において大きな位置を占めていたと考えられる。

トク・シモムラの1939年「日記」には、日本から帰ってきた人からのお土産話を聞いたり(1939年5月14日)、日本から「かわせ」が届いたり(1939年8月3日)という記述もある。日本との個人的繋がりも重要だが、日系人同士の組織的繋がりも強かった。アメリカ合衆国在住の日系人たちは、様々な「在米日系人会」を組織し、団結と助け合いを維持していった。それらの組織は、各地域の領事館を通じて、日本政府との繋がりも強かった<sup>13)</sup>。また、1939年トクの「日記」においては、日系キリスト教会(美以教会=メソジスト派)での活動も頻繁に書かれている。キリスト教会において一世の人々と交流し、言語・文化・法律的立場を共有する人々との繋がり、彼女の心の支えであったろう。

## II. 1939年の「日記」(2): 「キリスト教会婦人会」

1939年1月1日、トク・シモムラの「日記」によれば、次のように年が明けた。

終日大雨 一家そろふてお祝いのおぞうにして 名々 年詞にまわる 萩

---

・ The year of 1943: January 1; January 29; January 30; February 6; February 8; February 9; February 13; February 19; February 26; February 27; March 14; March 24; April 30; June 17; July 7; September 10; October 26;

これ以降、本論文内には日付だけを記すものとする。トクの「日記」では、時々変体仮名が使われているが、現代の読者が読みやすいように、本論文内引用では、変体仮名のほとんどを平仮名におきかえた。また、同様の理由で、旧漢字を新漢字におきかえた。

13) ユウジ・イチオカ『一世：黎明期アメリカ移民の物語り』(富田虎男・糸井輝子・篠田左多江訳 刀水書房 1992年), pp. 175-182.

島さんを初め 松田・榎木さんへと 教会ハ新年の元旦礼拝にて 雨中にかかわらず多数出席 いと げんしゆくに礼拝する 夜早々帰りて 木本さん方へ御年詞にゆく 渡米初めての恵まれたる豊かなる 静けき新年をかんしやすする 雨ハ終日ふりやまぬ  
(1939年1月1日)

トクがシアトルに来てから27年目の正月、トクは51歳になっている。産婆として充実した仕事人生を過ごし、子供を3人育て、この年3月には家を引越しているが(1939年3月18日)、これは後に完全にシモムラ家の所有となった家であろう<sup>14)</sup>。また、6月17日には長女のふみが結婚式をあげ、トクはこの記念の日に「人生の波に抗ひ強く生きよ」と日記に書いている(1939年6月17日)。6月25日、長男カズオに男の子が誕生した。トクはこの年後半期は、高血圧のため体調がすぐれず、「日記」にも血圧数の記録が増えていく。

1939年9月1日、ドイツがポーランドに侵攻し第2次世界大戦が始まった。アメリカ合衆国西海岸にいたトクにも戦争のニュースが入っていたはずであるが、この年の8月から12月まで、トクの「日記」は、2週間も3週間も連続して白紙状態という事が数回ある。日記記述がなかった理由のひとつは、彼女の体調不良のためであったろうとも推測されるか、本当の理由は不明である。

トク・シモムラは、1939年元旦の「日記」に、シアトルで築き上げた生活に一定の満足感を表現している。1939年、彼女はまだ日本とつながりを持っていたが、当時の政治的状況に深く巻きこまれたつながりも、トクは「日記」に書いている。

例えば、2月12日、トクが通う日系キリスト教会(美以教会)では、「紀元節礼拝」が行われた。「帝国2599年の歴史」と「日記」に記述があるのは(1939年2月12日)、翌年1940年に予定されている「紀元2600年祝典」を意識してのことであろう<sup>15)</sup>。3月2日「日記」には、「皇室において王女が誕生あそばさ

14) 金田由紀子「トク・シモムラの「戦争日記」」(2017年3月)、p.50を参照。

15) ケネス・ルオフ『紀元二千六百年』(木村剛久訳 朝日新聞社 2010年)参照。

る」との記述もあり(1939年3月2日)、トクは皇室への関心を示す。

1939年3月、トクの「日記」で目を引くのは、「慰問袋」である。3月6日「日記」には、

夜 皇室慰問袋の件に付 各キリスト教婦人会の代表者と会合  
(1939年3月6日)

とあり、「わが教会にて二百引きうくる」(同日)と続く。この後、3月13日・14日・15日・16日の「日記」には、3月13日に「柏木テーラーの店で慰問袋の裁断」を行うところから始まり、仲間や近隣同士で協力し、目的を果たした様子が記録されている。トクは、自分が中心になっている仕事なので、「責任の加わりて力も入れる」とも書く(1939年3月13日)。3月15日の日記に「今更乍ら日本国民の力強さをかんじぬ」とあるのは(1939年3月15日)、シアトル地区日系社会の団結力の強さに言及したものであろう。4月10日、依田さんが来訪し、「残りし慰問袋 一個お渡しする」とあり(1939年4月10日)、この時期の慰問袋の話題が一応終結している。

1930年代終わりのシアトル日系社会で、日頃の教会婦人会における女性同士の強い結びつきが、慰問袋づくりに役立ったのは確かであったろう。実務にすぐれたトクは、短期間にテキパキと慰問袋づくりを進めた印象である。

### III. 1939年の「日記」(3): 社会的背景

現代人には耳慣れない「慰問袋」とは、次のようなものである。

日本の国内から戦地の将兵へ慰問のために送られた袋。ふつう横30cm、縦40cmぐらいの布袋で、中には武運長久の御守、薬品、タバコ、セッケン、缶詰などの日用品と慰問状が入れられ、それが契機となって兵士と差出人との間で文通が行われることもあった<sup>16)</sup>。

16) 「慰問袋」『世界大百科事典』(Database: Japan Knowledge Lib) (2019年5月4日参照)

慰問袋への取り組みは日露戦争 [1904年-1905年] の時に始まり、満州事変 [1931年勃発] 以後広く実施されるようになった。

このころになると、全国の学校や職場で取り組まれたのをはじめ、市町村当局が婦人会や青年団の協力のもとに町内会や部落会をとおして慰問袋の作製を各家庭に割り当てており、慰問袋は市町村当局を経て軍の恤兵部<sup>じゅうへいぶ</sup>に集められ戦地に送られた。町内会など地域単位の組織は、行政当局によってしだいに国民組織に編成され、慰問袋や兵士との文通という活動は、兵士ばかりでなく銃後の国民を戦争協力体制に組み入れていく契機となったのである<sup>17)</sup>。

日本で発信されている一資料では以上のように説明されているが、実は慰問袋 (“imonbukuro”) 送付は、アメリカ合衆国在住の日系社会でも行なわれていた。

歴史家のブライアン・マサル・ハヤシによれば、南カリフォルニアにおける日系社会は特に慰問袋送付に熱心であった。1938年1月までに18,000から23,000個にも及ぶ慰問袋を南カリフォルニアから日本軍兵士のために送っている。この活動の中心にいたのは、メソジスト教会とユニオン教会に所属する日系女性たちであった。また、1939年から1941年までの間、この地域のメソジスト教会婦人会だけで、さらに300個以上の慰問袋を送っている<sup>18)</sup>。特にロサンゼルスのプロテスタント教会の日系女性たちは、日本皇室との繋がりが強かったとも伝えられている<sup>19)</sup>。

トク(・マチダ)・シモムラは、渡米前、日露開戦時(1905年)に徴兵され、「横浜丸」という病院戦で戦争を目の当たりにした。「海戦の戦場すぐ近くで」砲声が聞こえる中、「死を覚悟して」戦争に向き合った恐怖の経験をトクは晩年

17) 「慰問袋」『世界大百科事典』(Database: *Japan Knowledge Lib*) (2019年5月4日参照)

18) Brian Masaru Hayashi, *For the Sake of Japanese Brethren: Assimilation, Nationalism, and Protestantism among the Japanese of Los Angeles, 1895-1942* (Stanford, California: Stanford University Press, 1995), pp. 105-106.

19) *Ibid.*, p. 104.

に受けたインタビューで語っている<sup>20)</sup>。また、1942年5月28日、ピヤロップの仮収容所にいた時には、戸外で降る雨の音が「キカン銃の音に似たる」と「日記」に記しているのは(1942年5月28日)、日露戦争での銃声が記憶に残り、心的外傷に似た心の傷が彼女の中にあったからではないか、と筆者は推測する。トク・シモムラ個人としては戦争を誰よりも嫌い、恐れていた。戦争を支援する気持ちで慰問袋作成に協力したわけではなかったであろう。

トクの「日記」に書かれた慰問袋作りは、彼女と当時の日本との結びつきを示してはいるが、その結びつきは、必ずしもトク個人の意思によるものではなかった。トク一人のみならず、アメリカ合衆国で暮らしていた日系移民全体が強いられた政治的立場のために、米国の日系移民は、「日本との結びつきを断ち切ることは困難だった」と塩出浩之は述べている。塩出は、日系移民が日本国家と強いつながりを持たざるをえなかった理由を3つ挙げている。まず第一に、日系移民一世ほぼ全員が、1952年以前には「帰化不能外国人」であり、国籍は日本であった。次に、出生国主義のアメリカ合衆国では、日系二世には市民権(国籍)が与えられたが、日本国籍法(1899年)を根拠として、「両国の出生の届け出がなされた日系二世は自動的に二重国籍者」になった。そして、日本政府は「日本の行政権が及ばないアメリカの日本人移民を、日本国籍を通じてコントロールしようとした」という背景もある。例えば、サンフランシスコ総領事は、「1908年以後、日本人移民指導者に在米日本人会を組織させ、領事館での在留登録証明の権限を日本人会に与えた」。つまり、「日本人会を日本政府の下部機関化」していたのである<sup>21)</sup>。

アメリカ合衆国の側からは、日系移民の支配をめざしているような日本は、「移民と植民を世界制覇の手段として利用しようとしている拡張主義国家(“expansionist Japan”)」であると見た人々もいた<sup>22)</sup>。

20) 伊藤一男『北米百年桜 正・続2巻』(日貿出版社 1973年), pp.30-34.

21) 塩出浩之『越境者の政治史: アジア太平洋における日本人移民と植民』(名古屋大学出版会 2015年), pp.331-334.

22) Lon Kurashige, *Two Faces of Exclusion: The Untold History of Anti-Asian Racism in the United States* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 2016), p. 134.

トクが暮らしていたシアトルにも日本政府がコントロールする日本人会が創設された。ユウジ・イチオカによれば、北西部太平洋岸地方では、「ワシントン州とモンタナ州の支部が1913年に設立されて、シアトル領事館のもとでシアトルを本拠地としていた西北部連絡日本人会に加入」している。1923年にはシアトルでは15の支部が存在し、1914年から1929年まで、他の3つの機関（オレゴン・サンフランシスコ・ロサンゼルス）及びカナダ日本人会と連合し、「太平洋沿岸日本人会協議会」も存在した<sup>23)</sup>。

1907年から1908年に交換された「日米紳士協約」により日系移民が制限され、1913年には「外国人土地法」が制定され西海岸地域の日系一世による土地所有が禁止され、1924年にはさらに厳しい出身国別割り当て制度の移民法（通称「排日移民法」）が制定されるなど、外堀を埋められていくように、アメリカ合衆国側から日系人への排外主義が進んでいった。

「日系移民のナショナリズム：一世と1937年から1941年の日中戦争」と題する論文で、ユウジ・イチオカは、戦前における「一世のナショナリズム」の事例を指摘し、細かに分析・評価している。「慰問袋」もある意味で一世の「ナショナリズム」をあらわすものであることを否定していない。しかし、「一世は、いわゆる帰化不能外国人であったから、帰化の権利を拒否され、一世はアメリカの政治手続きに参加することができなかった」。「従って、日本に対して一世が愛国者として一体化したのは、自分たちを拒否したアメリカから、心理的に目をそむけたかったからである」と書いている。日系一世の人々の一般的状況として説得力のあるコメントである<sup>24)</sup>。

トク・シモムラの場合には、メソジスト派の日系美以教会に所属し、教会活動・信仰生活を通じて、欧米の習慣・価値観・思想に触れる機会も多かった。海外在住の日本人として、日本人社会に閉じこもっていたわけではなかった。

23) ユウジ・イチオカ『一世：黎明期アメリカ移民の物語り』, p. 175.

24) Yuji Ichioka, "Japanese Immigrant Nationalism: The Issei and the Sino-Japanese War, 1937-1941", in *Before Internment: Essays in Prewar Japanese American History* (Stanford, CA: Stanford University Press, 2006), pp. 180-203. 引用したイチオカのコメントは同論の p. 198, p. 199.

トクが所属していたシアトルの日系美以教会の歴史をみると、本教会はアメリカ社会との深い関わりの中で創設され、存続してきた教会である。1904年に鶴田源七牧師と7名の信者が組織し創設したメソジスト派教会であるが、当時の日本人美以教会総理は、明治初年に宣教師として日本に渡来したM.C.ハリス博士であった。1906年に吉岡誠明牧師が引き継ぎ、1913年まで本教会で牧師を務めた。その間、1912年には恒久的な聖堂を建てた。吉岡牧師と彼が率いる日系教会の信者たちは、1906年シアトル市長に選出された共和党のウィリアム・H.ムーアに協力し、当地における売春の廃絶のために闘った経緯もある。日米開戦により1942年に強制収容された日系人たちは、本教会も去らざるをえなかった。しかし、M.L.ブレイン氏他のアメリカ人メソジスト派の人々が、日系人たちが再度本教会に戻ってくる日まで教会堂を守ると日系教会員たちに約した。その言葉通り、シアトル美以教会会堂は戦争中に廃れることはなく、終戦後、日系人たちの手に戻った。その歴史を記念し感謝を表現するために、1956年、本教会は「ブレイン記念合同メソジスト教会」と改名され今日に至る<sup>25)</sup>。

日系キリスト教会を活動の基盤として「慰問袋」づくりをするのは、ある意味で矛盾した行動でもあった。客観的に見ると、トクも他の日系人キリスト教徒たちも、キリスト教の神と皇国の天皇に同時に仕えていたことになる。本来はありえないことであったかもしれない。

アメリカ合衆国が戦争に直接関与していなかった時には問題が表面化しなかったが、日米間の関係が悪化し戦争が勃発すると、トクは、日本かアメリカ合衆国か、自身の帰属の選択を迫られることになる。

#### IV. 1941年・1942年の「日記」から

1939年以降の「日記」で(スミソニアン)国立アメリカ歴史博物館が所蔵し

25) 竹内幸次郎『米国北西部 日本人移民史 上』(奥泉栄三郎監修・解説 雄松堂出版 1929年出版本の1994年復刻版), pp.458-460; Kazuhiro Okabayashi, *Japanese Prostitutes in the North American West, 1882-1920* (Seattle: University of Washington Press, 2016), p.189; “Our Story-Blaine Memorial United Methodist Church” ([blaineonline.org/about-us-2/our-story/](http://blaineonline.org/about-us-2/our-story/)) (2019年4月19日参照)

ている次のものは、1941年のトク「日記」である。1941年1月1日の「日記」は、2年前とは異なり、「全世界をお[お]ふ黒(暗)雲よ 晴れ渡れよ」(1941年1月1日)と戦時の世界情勢を反映する心境を表した書き出しで始まる。アメリカ合衆国は第2次世界大戦にまだ参戦していなかったが、国内には参戦への動きも強くなっていた。1941年夏ごろから、トクの「日記」には、日米関係が悪化していく経緯が書かれている。「資金いよいよ凍結令出しと 戦争の一手手前なり」(1941年7月29日)、道夫[次男]から長距離電話で助言があり「バンクに金あらば出しなさいとの事」(1941年7月30日)、「日本送金のため銀行へゆくもだめ 困った事なり」(1941年8月14日)と書いているが、日系人の受難は日米開戦前から始まっていた。11月4日には「氷川丸出帆」もこの日が最後とあるが(1941年11月4日)、日米間の人の流れが遮断され、11月27日には次のような記述にいたる:「日米間の問題 いよいよむづかしく 望みも薄き様にて心細し」(1941年11月27日)。トク・シモムラは新聞などから、政治情勢の情報を得ていたようである。

12月7日、日本の真珠湾攻撃により始まった日米戦争(アジア太平洋戦争)の「夢のようなニュース」は突然にやってきた(1941年12月7日)。トクは料理教室を途中で去り、ラジオの前に座り、改めてニュースを聞く。その後、トク・シモムラや他の日系人・日系アメリカ人に降りかかった受難の数々は彼女の「日記」にも記されている。既出の拙論においては、開戦から終戦(1945年8月半ば)までに記されたトクの「日記」の一部を紹介し、トクの戦争観などを検討した。その拙論から、アメリカ合衆国やその政策に関して、トクがどのように変わっていったかの流れを以下の段落に再録し、簡略に述べる<sup>26)</sup>。

開戦直後の12月9日には、「神を[よ] わがアメリカを守り賜へと祈るのみ」と書き(1941年12月9日)、1942年1月30日ルーズベルト大統領の誕生日には、「何卒お元気に活動せられん事を」とお祝いを述べている(1942年1月30日)。1939年には日本に帰国することさえ考えていたが、今や日本との絆が断ち切られ、自分自身の生きる場はアメリカ合衆国しかない、という危機的心情

26) 金田由紀子「トク・シモムラの「戦中日記」」(2017年), p. 51-p. 52.

が表れた記述である。しかし、そのアメリカは、1942年2月19日、「大統領令9066号」〔後に日系アメリカ人の強制収容を導くことになる指令〕を公布し、日系人を奈落の底に突き落とした。「大統領令9066号」が出たあとのトクは、合衆国政府の対応への失望と恨みの感情的反応を隠さない。「悲しむ」（1942年3月8日）・「涙」（1942年4月18日・4月28日）・「ガバメントの上に恨みの言葉の一つも進呈したくなる」（1942年9月9日）と、元々は冷静沈着なトクにしては珍しい程の直情的表現が「日記」を埋めていく。

#### V. 1943年の「日記」：アメリカ合衆国政府との対峙<sup>27)</sup>

1943年正月、トクは『新約聖書』「ピリピ」〔「ピリピ人への手紙」〕より引用し、「父のみかみよ このとしも みわざのためにささげれば わがみにさちのあらずとも みさかえこそ あらわさめ」と書いている（1943年1月1日）。全米10ヶ所の強制収容所に送られた日本人・日系アメリカ人とアメリカ政府との緊張関係が頂点に達するのは、1943年冬である。強制収容された日系人に対して合衆国政府から「忠誠テスト」が行われ、強制収容されていた日系二世に対して事実上の徴兵が行われたからである。トクは、「市民権保護のため 誰かの犠牲を要すのだ 終日考へて過せり」と書いている（1943年1月29日）。そして、日米開戦から1年2ヶ月以上が経ち、ピヤロップとミニドカで強制収容されてから9ヶ月以上になる1943年1月30日、トクは「日記」におよそ次のように書いている。

今日も又雪 風の気味なり 心地あしい いつものように働く  
午後 [ワシントン州] 前セネターの夫人代議士の日本人の  
イバキレイションの正当なりしやについて 憲法のたてまえより  
説き大[い]に力付けらる (1943年1月30日)

27) 本項Vは、第55回日本比較文学会東京支部大会（2017年10月15日）の発表において筆者が論じた内容（「ミニドカ強制収容所の体験を語る」）の一部を加筆訂正したものである。

トクの記述だけでは意味が不明であるが、収容所で発行されていたバイリンガルの新聞『ミニドカ・イリーゲーター』(*The Minidoka Irrigator*)<sup>28)</sup>の1943年1月27日版・1月30日版のそれぞれ第一面における予告によれば、トクが日記に記している元上院議員とは、メアリ・ファクハーソン氏 (Mrs. Mary Farquharson 1901–1982: 1934–1942年上院議員) である。彼女は、「アメリカ自由人権協会」(“America Civil Liberties Union”)のリーダーであり、「立退きの合法性」と題した講演を最終的には1月30日に行った。1月27日の記事には、ファクハーソン氏は、「転住」(“relocation”) [= 強制収容] と法廷における様々なテスト・ケースを議題として講演するとの予告が載っている<sup>29)</sup>。1月30日の記事には、通訳が付くこと、また収容所全員出席が望ましいと書かれている<sup>30)</sup>。

メアリ・ファクハーソン元上院議員は、アジア・太平洋戦争中、日系アメリカ人の集団強制収容に対し反対の声をあげたアメリカ人のひとりである。西海岸の陸軍が主導した「日系人の強制的立退き」と「外出禁止令」に抵抗し逮捕された日系2世、ゴードン・ヒラバヤシ (Gordon Hirabayashi 1918–2012) を支援する組織を設立し財務担当に就いた。彼女はヒラバヤシに対して、彼の事例を「テスト・ケース」<sup>31)</sup> にしてはどうかと提案した当人である<sup>32)</sup>。この女性活動家は、ミニドカ強制収容所を訪れた時、ゴードン・ヒラバヤシによる法的闘いの例を話し、それを聞いたトクが「憲法のたてまえ」 [= アメリカ合衆国憲法本来の趣旨] を知り、大いに発奮したのであろう。

28) 1942年9月10日より1945年7月28日まで刊行。出版地は、アイダホ州ハント (Hunt, Idaho) である。

29) 1943年1月27日版『ミニドカ・イリーゲーター』第一面には、“She [Mary Farquharson] is scheduled to talk about various problems, principally about relocation and about the various test cases before the Court, . . .”と書かれている (Vol. II, No. 8, Wed, JAN 27, 1943, P1)。本論文における本新聞記事は、Library of Congressのwebsiteを参照。

30) *The Minidoka Irrigator*, Vol. II, No. 9 (Sat. JAN 30, 1943), p. 1.

31) テスト・ケースとは、「同様の事実上・法律上の争点をもつ当事者や団体が特定の事件を選んで重点的に準備し、裁判所の判断を求めるもの」である (山倉明弘『市民的自由: アメリカ日系人戦時強制収容のリーガル・ヒストリー』彩流社, 2011年, 309ページ)。

32) “Mary Farquharson”, *Densho Encyclopedia* (<https://encyetopedia.deusho.org/Mary%20Farquharson/>) (2019年5月25日参照)

トクの「日記」には、元々彼女の思想表現の記述は少ない。抑圧的な環境の戦時中では、なおさら現行政治への批判はしにくかったであろう。それだけに、政治思想・アメリカ合衆国憲法下における日系人強制収容所の非合法性を主張する1943年1月30日付トクの「日記」は貴重である。

シアトル出身ゴードン・ヒラバヤシの裁判は前年10月、シアトルの連邦地方裁判所においてヒラバヤシの有罪が確定し、連邦最高裁判所における審理の道を進んでいる最中であった。オレゴン州のミノル・ヤスイ(1916-1986)もまた、夜間外出禁止令を守らない・当局への出頭拒否と収容所への転住を拒否したとして有罪判決を受けたが、ヒラバヤシと共に最高裁判所での審理を受けることになった<sup>33)</sup>。トクが、メアリ・ファクハーソン元議員の講演を聞いたのは、連邦最高裁判所での判決の途上であった。ヒラバヤシ等の逮捕が、「適正な手続きなしに、生命、自由、または財産を奪われることはない」という一文を含む憲法補正第5条に抵触するかどうか争われていた<sup>34)</sup>。

ミニドカ強制収容所の環境全体も、トク・シモムラの公民権意識向上を促すものであったと考えられる。特に収容所内で週刊として(多い時には週二回)発行されていた新聞『ミニドカ・イリゲイター』には、生活上の実用的な情報と独自の論説の他、収容所外のアメリカ人たちが日系人強制収容所の存在・待遇をどう考えているかの記事も掲載されていた(収容所外の一般新聞からの転載を含む)。このバイリンガルの新聞で、トクが直接読んだのは主に日本語部分であったろうが、強制収容所においても非常に社会的で人望があったトクには、英語部分に掲載された記事情報もある程度伝わっていたと考えられる。

『ミニドカ・イリゲイター』独自の記事も、強制収容の合法性について疑義をただし反対を表明することがあった。*Densho*によれば、ミニドカ強制収容所が開設されてから3ヶ月後の1942年11月20日号版「立退きは非合法ではない

33) ヒラバヤシ裁判の詳細に関しては、山倉明弘『市民的自由』pp.306-319; 藤倉皓一郎・釜田泰介「資料: 日系アメリカ人事件の研究(一)」『同志社法学』27号3巻pp.45-64等を参照した。

34) 山倉明弘『市民的自由』p.309.

か?」(“Evacuation illegal?”)は、本紙「発行以来最も過激な声明」(“the *Irrigator*’s most radical statement yet”)である<sup>35)</sup>。年が明けて、1943年1月30日版、ファクハーソン元議員による講演前後の種々の記事を見ると、社会から隔離され強制収容されている日系人に対して同情し正義を求める他紙の記事も転載されている。また反対に、日系人を差別し中傷する他紙からの転載記事もある。例えば、1943年1月27日号の日本語部分を見ると、アイダホ州の病院は日本人を断れとした記事、アメリカ合衆国内にいる日系人には思想的に3種類の人々がいるとした『沙市タイムス紙』から転載の客観的分析記事がある<sup>36)</sup>。本紙記者が書いた「正岡マイク氏」[JACLの代表的活動家]による激励の言葉もある。同日の『ミニドカ・イリゲーター』誌には、日系人強制収容所では日系人は贅沢に暮らしているとの驚くべき中傷発言記事(英文)も載っている<sup>37)</sup>。また、その対極として、同年2月3日号には、「深刻な悩みを秘め平然たる日本人」と題した日本人を称え日系人の強制収容所を批判する(日本語)記事もある<sup>38)</sup>。

もし、日米開戦以前のシアトル日系社会が全体的に自足的で閉鎖的であったとすれば、その状況とは対照的に、戦時中のミニドカ強制収容所にいた日系人たちはアメリカ社会全体の動向に巻き込まれ自分たちの収容所生活も外部から注目されていた。その結果、強制収容所外のアメリカ人たちが日系人をどう見ているかを強く意識したのではなかろうか。収容所の中でも、女性たちのリーダー格であったトク・シモムラもまた、不本意にも、あからさまに差別的な環境を与えられ、彼女自身もアメリカ合衆国社会の中での自分の位置を確認していくことになる。

1943年2月トクの「日記」では、ミニドカ強制収容所で行われた二世の戦争志願兵募集について何度も触れている(1943年2月6日・8日・9日・13日・

35) *The Minidoka Irrigator*, Vol. I, No. 20 (Sat., Nov. 21, 1942), Hunt, Idaho. p. 1. *Densho* では“November 20”と日付を間違えている [https://encyclopedia.densho.org/Minidoka%20Irrigatory.20(newspaper)/] (2019年5月25日参照)

36) *The Minidoka Irrigator*, Vol. II, No. 8 (Wed, JAN 27, 1943), 日本語版: Page 1–Page 3.

37) *Ibid.*, p. 5

38) *The Minidoka Irrigator*, Vol. II, No. 10 (Wed, FEB 3, 1943), p. 10.

19日・26日・27日)。市民権と引き換えでもあるかのような志願兵勧誘に対しては、「ご苦労様の事なり 親心しらずと同情する」(1943年2月26日)と書くが、義理の息子が志願兵に関心をもっているとわかり、それは他人事ではなくなる(1943年2月19日)。

また、トクの3月・4月の「日記」には、痛ましい気持ちがこめられた、入営する二世兵士(「志願兵」)の送別会記録が残されている(1943年3月14日・24日・4月30日)。

1943年6月21日、ゴードン・ヒラバヤシ(及びミノル・ヤスイ)に対して連邦最高裁判所の判決が出た。ヒラバヤシとヤスイの敗訴である。『ミニドカ・イリゲーター』は、5日後の6月26日版に「最高裁は夜間外出禁止を支持する」(“Supreme Court Upholds Curfew Regulations”)との大見出しで、本裁判の経過・本判決内容の詳細を簡潔にまとめた長い記事を出している。この国の市民である二人に対して行なった軍の措置に「合憲性」があったかが争われた裁判であったことが書かれている。トクはこの記事内容も知っていたであろうが、市民権をめぐる日系人の裁判への言及は、1月30日以降最高裁判決までのトク「日記」には見当たらない。

最高裁判決に関してはトクも失望したはずだが、信仰生活においては間違いなく希望を持ち続けていたであろう。この頃のトクは、毎週日曜日に行われる礼拝には出席することが多かった。時にアメリカ人牧師による説教もあったようだが、日系人牧師も様々な名前が登場する。トクが牧師による説教の内容を具体的に書くのは珍しいことであるが、よほど心に沁み込めた説教であったと考えられる。6月17日「日記」には、次の記述がある。

午後二時 第六レクで開会 有志集会五十四人 山鹿先生ハ 旧約を引照して「神戦ひ賜ふ 汝ら静かに居るべし」と難局に対して吾らのあるべき心情を話さる 落付いて神を信じて強く居る様……進めなり(1943年6月17日)

トクの「日記」には出典を記していないが、この日、牧師は「出エジプト記」

(14-14)を引用し説教したものであろう<sup>39)</sup>。「出エジプト記」はエジプトに囚われの身であったイスラエルの民が神の導きにより解放への道を歩む記である。

7月7日の「日記」には、「今日 日清開戦七年目との事なり ああ末おそろしい大戦よ 世界戦争も又いつ迄つづく事か」とアジアの戦況について嘆く記述がある(1943年7月7日)。4年前、日中戦争に否応なしに巻き込まれた日々を思い出していたのだろうか。秋になり、兵隊になるために収容所を出る若者と兵隊を見送る母親たちを見て、「ああ戦争だと目頭が熱くなる」とトクは書く(1943年10月26日)。この間、9月10日にはイタリア降伏のニュースに触れ、「詩の都 美の国 音楽の国イタリアの最後痛ましい」とトクは嘆きの言葉を吐いている(1943年9月10日)。

トク・シモムラがミニドカ強制収容所を去るのは1945年5月、そしてアメリカ市民権を実際に取るのは1954年である。しかし、1943年1月末には自らがアメリカ市民である事を確信し、理不尽な境遇の中、信仰を糧に法的にも正式なアメリカ市民になる日まで必死に生き抜いた。1912年にアメリカ合衆国に渡ってきた移民一世の女性として、市民権を得るまでの月日は長く苦節に満ちた行程であったが、その記録を自らの「日記」に残し、私たちに伝えてくれたトク・シモムラに深い感謝の念を覚える。

## 謝辞

本研究は、青山学院大学経済研究所の「2017年度海外出張助成金」による研究成果です。本研究を支援していただいた経済研究所に感謝の意を表します。

また、本論文のために、資料(トク・シモムラの「日記」原本)を提供してくださいましたスミソニアン博物館(National Museum of American History)、及びご担当者のMs. Noriko Sanefujiに感謝の意を表します。

39) 藤原淳賀「クリスチャンは戦争をしてもよいか? 3 神が戦われる」(<https://wlpn.or.jp/inokoto/2016/04/26/クリスチャンは戦争をしてもよいか?—3—神が戦わ/>) (2019年5月26日参照)を参照; ロジャー・シモムラは、*Minidoka Series*で、日本人の強制収容を「出エジプト」にたとえた絵画[*Minidoka No. 2 (Exodus)*, 1978]を描いている。